

食害防除策が非害鳥であるタゲリに与える影響の解明



知花 峻輝¹・大槻 恒介²

1. 長崎大学 環境科学部 2. 長崎大学 大学院 水産・環境総合研究科

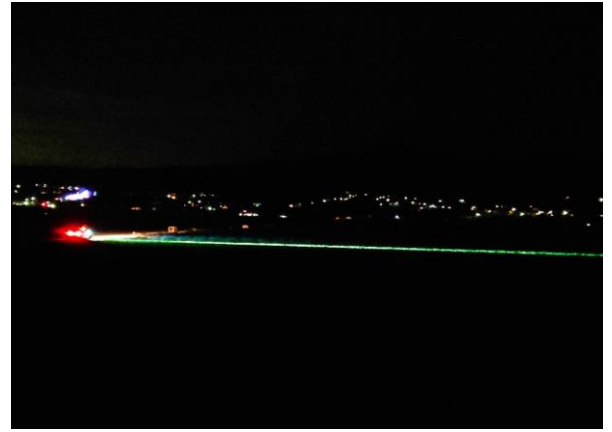
はじめに

鳥類は種子散布やバードウォッチング等の様々な生態系サービスを提供する一方で、農作物被害をもたらすことが知られています。鳥類による農作物被害総額は、全国で約27.6億円にまで上り（農林水産省 2023）、その対策に関心が寄せられています。

様々な被害をもたらす害鳥への対策として光照射や音声利用は有効であることが知られています (Clausen *et al.* 2019, Gorenzel *et al.* 2002, Withford 2008)。長崎県の諫早中央干拓では、カモ類が麦の新芽を採食する農業被害が生じています。その対策として、同様の追い払いが行われています。

これらの防除策を行っている夜間の圃場内には、**農作物被害をもたらさないタゲリ *Vanellus vanellus* やヤマシギ *Scolopax rusticola* も採餌や休息の場として利用していることを昨冬観察しました。もし食害対策により非害鳥種も移動を余儀なくされるのであれば、**逃避や睡眠妨害、採餌妨害等の被害**を被っているのではないかと考えています。**

しかしながら、有害鳥ではない非対象種への影響に関する調査が行われておらず、防除策の有効性が害鳥種に限定されるのか明らかにされていません。その解明には、**非害鳥種の一時的な逃避等の影響およびその積み重ねにより選択される利用環境を調べる必要**があると考えています。昨冬の観察経験から、非害鳥の中でタゲリが光に対して鋭敏に反応するように感じました。そのため、本研究は本種を対象とします。



▲光照射による夜間防除の様子



▲夜間圃場を利用するタゲリ

本研究では、食害対策がタゲリに与える即時的・慢性的な影響の両面から調べ、非害鳥種への影響を明らかにします

目的

1. 農作物被害防除策を受けたタゲリは利用場所から即座に逃避するのかといった**即時的な影響**があるのか調べます
2. 農作物被害防除策が利用環境の選択につながるのかといった**慢性的な影響**があるのか明らかにします

調査内容

調査地：長崎県中央干拓

■ GPSロガーの装着

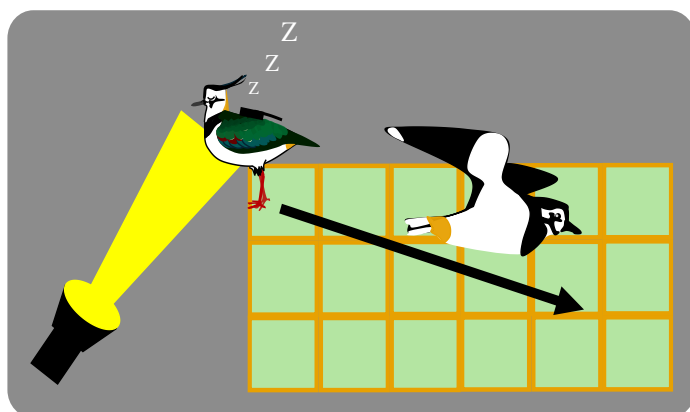
11月から1月にタゲリを捕獲し、GPSロガーを装着します。ただし、ロガー重量が体重3%未満の個体に装着します。

■ 即時的な影響の調査

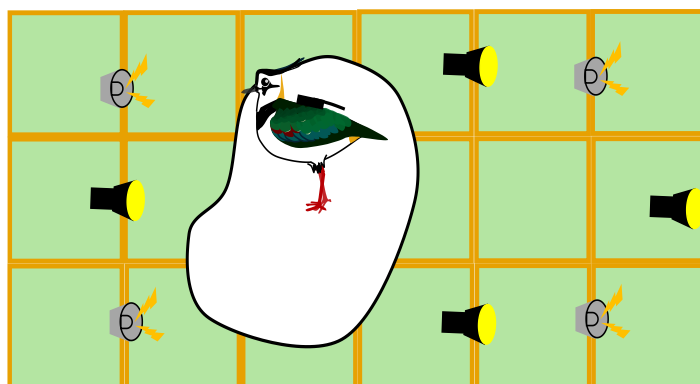
対策車にトラッカーを付けて光照射位置を、ICレコーダーで音声を記録します。個体位置情報を12回/時の頻度で3夜分記録します。これらを基に食害対策の影響を調べます。

■ 慢性的な影響の調査

位置情報を4回/日の頻度で記録し、越冬期を通した利用環境の選択が夜間における食害対策の影響を受けるか調べます。



▲即時的：光に反応し逃避する睡眠中のタゲリ



▲慢性的：防除策を忌避した環境を利用するタゲリ

期待される成果

食害対策は安定した食料供給の実現のために重要であり、対策の実施は今後も必要になります。しかし、有益な食害対策が環境を共有する他の鳥類も巻き添えにしているかもしれません。本研究では、非害鳥であるタゲリが食害対策により受ける影響を明らかにします。

支援金の使途

いただいたご支援は調査機材の購入や通信費、調査地までの交通費等に充てさせていただきます。

ご支援よろしくお願いたします。